

特集 文学教材で何を教えるか

美味しい小説 —小説が教材になるまで—

安田正典

すぐれた料理人のように

すぐれた料理人のように、素材の味を活かし、食べる人の口に合う程よい大き
さで、甘いものは甘さを、苦いものは苦
さを、硬いものは硬さを、軟らかいもの
は軟らかさを失わぬように、程よく手を
加え、美味しい小説を、香りもそのまま
に生徒の前に差し出したいと、常々思っ
ている。そして、できればその小説を、
厨房から漂ってくる匂いに引きつけられ
た子どもたちが期待のソースを準備して
待つように、私たちの教室の生徒達もま
た、待ち受ける未知の味に胸ときめかせ
て、お腹すかせて待つようでありたいと
思っている。どうすればそんな料理を生
み出せるか。どうすればそんな料理人に

なれるか。

なぜ自分はその小説に惹かれるのか

なぜ自分はその小説に惹かれるのか—
私の料理人への道はいつもこの問いか
ら始まる。他の小説ではない、その小説
の魅力を解き明かさなければ、美味しい
小説の授業はできない。そして、その小
説の魅力、面白さを解き明かすためには、
一読者としての私の感じ方を徹底的に追
究しなければならぬ。好みも含めて、
私は私自身を知らなければならぬ。そ
うでない、私は私を、その小説を面白
いと感ずる私を生徒達に語ることができ
ない。そして、私が私を語ることができ
なくて、どうして生徒達とその小説の面

白さについて語り合うことができるだろ
う。考えてみれば、わがままな道ではあ
る。しかし、料理人の道は、栄養士の道
や食品分析の道とは違うはずだ。もちろ
ん分析的視点は欠かすことができないが、
分析だけでは美味しい料理は作れない。
料理人は自分の舌を信じるものだ。舌を
信じ、舌の言葉を知らなければならぬ。
まず自らに問いかける。なぜ自分はそ
の小説に惹かれるのか。その小説の面白
さはどこから生まれるのか。以下、教科
書に取り上げられている小説を例に挙げ
て、一読者としての私の感じ方を提示し、
本稿の読者の参考に供したいと思う。

角田光代「ランドセル」の場合

角田光代の「ランドセル」は、主人公
(二十七歳の「私」)が、幼稚園児の頃の
自分を回想し、その頃の自分と対比する
形で現在の自分について語る小説である。
内容的には難しいところのない、謂わば
「二読で内容を理解できる小説」である。
この手の小説は厄介である。「分かり易
すぎる」からだ。一見、何も教えること
がないように見える。だが、本当にそう
か。私は、そうは感じなかった。そこで私
は次のようにこだわってみた。

この小説の面白さは、「子ども」はまだ物事がわかっていない存在であり、「大人」はわかっていながら存在であるという世の中の常識を逆転させ、「子ども」は「大人」が思っている以上に自分のことも周囲のことも「わかっていいる」ものだし、「大人」は自分で思っているほど「わかっていない」ものなのだ、少なくとも自分はそうだった、という語り方のユニークさにある。(対比)は細部に及び、徹底している。そこにこの作者のユーモアがあり、語られている「絶望」とは裏腹に、作品自体は明るく健康的である。そしてその(対比)の中に変わらぬ「私」、「ランドセル」を背負う「私」が立ち上がる。私(筆者)はその語り方に魅力を感じた。この小説は、出来事の語られ方に着目すべきだ、どのように語られているかという点にこそ、この小説の最も重要な部分がある——私はそう考えた。そこから私の美味しい小説の授業は始まる。

村上春樹「青が消える」の場合

村上春樹の短篇小説「青が消える」は、ソフトな管理が徹底し、人々の対社会的な不満が大きくなる前に、その不安の芽

が未然に摘み取られてしまう「もう一つの世界」を描いた小説で、短いながらも村上春樹らしいユーモアに満ちた小説である。管理社会には監視が付きものであるが、この小説に描かれた社会にはそのような露骨な監視はない。だが、「駅員」の応対に明らかのように、「中央コンピュータ」の支配は社会の隅々にまで行き渡っている。注目すべきは小説の結びの次の言葉である。

でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは僕が好きな色だったのだ。

誰も消えた青のことなんか気にしていない。監視され、管理されていることに気づいていない(少なくともそのように見える)。「僕」がそれに気づいてしまうのは、「僕」は「青」が好きだったからだ。「青」へのこだわりが、変化に気づかない人々の中で「僕」一人を目覚めさせている。二十一世紀型管理社会の到来を警告するという極めて政治的なテーマを扱いながらも、この小説が、PO Pな感覚、ある種の軽さを失わないのは、「不満を抱く存在」として、政治とは程遠い個人、「青」が好きな「僕」を置いたことよっている。「僕」はただ

「青」が好きなだけで、何か政治的な主張をしているわけではない。だが、好きなものを好きであると表明すること、好きであり続けられるということ、それ以上でもそれ以下でもないところに、管理的な圧力から身を守る最後の牙城があるのかも知れない。もしも「青が消える」が「赤が消える」であつたら、小説はたちまち政治的言説に飲み込まれ、小説としての足場を失っていたかも知れない。

時代への警告を発するにしても、作家には作家のやり方がある。アイロンがけをする「僕」の「青」への愛着とこだわりが、すべてを飲み込んでいこうとする巨大な力に対して、ささやかな抵抗を試みている。「壁と卵」の作家は、そのささやかな抵抗に寄り添い、味方しようとする。「壊れやすい卵」の側に立つのである。「青」への愛着は、かけがえのない個性への愛である。皆それぞれの「青」を大切にすべきなのだ。そしてアイロンがけを楽しむべきなのだ。そんなことを生徒に向かって話してみたい。

さあ、教室へ行こう。そこにもかけがえのない個性が待っている。私もまた、「卵」の側に立つのだ。

(やすだまさのり・名古屋市立富田高等学校)